

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：32627

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520231

研究課題名(和文)野間宏「青年の環」の創作過程と「全体小説」論の研究

研究課題名(英文)A Study of the creative process of Noma Hiroshi's "Seinen-no-Wa" and his theory of the "total novel"

研究代表者

井上 隆史 (INOUE, Takashi)

白百合女子大学・文学部・教授

研究者番号：10251381

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：神奈川近代文学館蔵の野間宏『青年の環』の原稿類や刊本に関してデータベースを作成して、各種資料所内容を容易に比較し、度重なる改稿過程を詳細かつ簡便に確認出来るようにした。その結果、次第に表現技法が工夫され、作品解釈の幅が拡がり、また深められる様相が明らかになった。

また、野間の「全体小説」論について、中村真一郎や三島由紀夫など日本の戦後文学、バルガス＝リョサなど世界文学、また「全体」をめぐる哲学思想と関連付けて考察し、その独自の価値を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Regarding a variety of manuscripts and printed materials of Noma Hiroshi's "Seinen-no-Wa" owned by Kanagawa Museum of Modern Literature, I have created the database, in order to simplify their mutual comparison and know handily and minutely the process of repeated revisions offered from the author. That brings to light the fact that Noma gradually elaborated his own technique of expression and succeeded in making the interpretation of his novel richer and deeper. And I studied Noma's theory of "total novel" in relation to Japan's post-war literature including Shin'ichiro Nakamura's works and Yukio Mishima's works, the popular world literature such as Vargas Llosa's works and the philosophical thought about "totality." Then I brought the unique value of Noma's literature into daylight.

研究分野：日本近代文学

キーワード：野間宏 戦後文学 世界文学 三島由紀夫

1. 研究開始当初の背景

本研究は、神奈川近代文学館蔵の野間宏『青年の環』の原稿、草稿など自筆資料を調査分析し、その成果を、戦後文学、および世界文学の観点から評価しようとするものである。

この研究に着手した主な背景(動機)として、次の2点を挙げるができる。

(1) 当該文献は日本近代文学研究における一級資料であるにもかかわらず、その膨大な量ゆえ、また内容の複雑さゆえ、調査、研究がまったく行なわれずにいたこと。

(2) 本研究はこれまで三島由紀夫を中心に研究を進めてきたが、その文学上の特質を正当に評価するためには、広く戦後文学、世界文学の全体的脈絡の中で個々の作品を見てゆく必要があると痛感した。そこで、三島に比べ研究が遅れている野間宏に着目することにした。なぜなら、野間は三島と政治思想的には対極に位置するといわれるが、ともに、戦後文学を代表する人物であり、この二作家を包括する理論的枠組みを見出すことができれば、そこから数々の有効な視点が得られると予測されたからである。

2. 研究の目的

本研究は、次の2件を主たる目的とする。

(1) 『青年の環』は八千枚におよぶ長篇小説であり、関連する原稿、草稿類も膨大な量に及ぶが、このうち入稿原稿やその改稿を中心とする資料について、内容、登場人物、テーマ、作品世界の時空間、推定される執筆時期、作品の最終形態との対応関係、主な改変箇所などを詳細に分類、整理したデータベースを作成する。その成果を踏まえ、度重なる改稿が、作品にどのような特質をもたらしているかを考察する。

(2) 『青年の環』、およびその創作理論である野間の全体小説論(『サルトル論』としてまとめられた)について、三島由紀夫、中村真一郎、武田泰淳、大岡昇平、大江健三郎ら国内の小説家、さらにはバルザック、プルースト、ジョイス、サルトル、フォークナー、バルガス=リョサ、ロベルト・ボラーニョら世界文学史における重要な小説家たちの作品および小説論との比較を通じて、総合的に考察する。同時に、全体性をめぐる哲学的考察をも視野に入れ、全体小説の意義を、思想的に検討する。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、以下の方法を採用した。

(1) データベース作成のため、定期的に神奈川近代文学館にて生原稿などの資料を閲覧、調査し、データベースを作成する。

(2) 比較対象となる作家の作品についても、必要に応じて原稿、草稿類を含む資料を閲覧し、哲学的観点をも踏まえつつ、調査、考察する。その際、単に戦後文学研究の枠に囚わ

れることなく、世界文学の見地から研究を進める。しかしながら、本研究者単独の作業には限界があるので、それぞれの領域の専門家に協力を仰ぎ、その知見に学ぶことにした。具体的には、本研究者の本務校である白百合女子大学大学院における学外講師陣による連続講演に研究協力者を招いて関連のテーマでの講義をお願いし、その成果をもとに、本研究者の編集により論集を刊行する。

4. 研究成果

主たる成果は以下の4点である。

(1) 『青年の環』の原稿類に関するデータベースを作成し、その主要部分について「野間宏『青年の環』草稿原稿資料総覧」として刊行した(私家版、文献=図書)。これにより、膨大な資料の概略が、はじめて一覽されるようになり、野間自身が強調する「一巻、二巻、三巻、四巻と巻が進行するごとに各人物のうちに隠された内容が、明らかにされ、事件の発展と同時に各巻の内容が、前よりも一段と深められていなければならない」「やむにやまれぬ八千枚」という長篇小説のあり方が、改稿作業によって、より効果的に実現してゆく過程も、明瞭に視覚化された。本データベースは、今後の『青年の環』研究の基礎となるものである。

(2) 野間の全体小説論の要点は、以下のようなものである。『サルトル論』によれば、作品の筋立て上のその都度その都度の時点では、作中人物の「うちに隠された内容」は、読者はもとより作中人物自身にとっても認識できず、その意味で、作中の人物たちは迷路の中を歩むようなものである。しかし、その時「作家は、各人物(作中人物のこと 引者注)がその欠如している人間の全体へと自分を越えて行くのにつれて、作家として、欠如している全体へと自分を越えて行くこととなる」という。さらに、その際、「作品の世界は現実の全体とは別個の、現実の全体に向い合い、現実の全体に対置される小説として、巨大な現実の全体と等価であり、さらにそれを越えているともいえる巨大な虚構の全体であるのです。このような(中略)全体を保っている小説は、もちろん全体の小説であって、それ故に全体小説とよんでよいものであるのです」と野間は言う。

これが野間の全体小説論の要点だが、それが、終戦直後から作家たちが企図し、昭和30年代後半からは、より実践的に追求された、この世の全てを小説に描き込もうとする全体小説を創作するための、(当時においては)最も練り上げられた理論であることを本研究は指摘し、その文学史的意義を明らかにした(文献=雑誌論文「昭和三十七年の全体小説論」、『四季』のアレティア)。

(2) 三島由紀夫は『サルトル論』ほど長大な創作理論は書かなかったが、しかし、やはり独自の理論に従って、三島自身が「世界解釈の小説」とよぶ長篇『豊饒の海』を執

筆した。この『青年の環』『豊饒の海』の二作品を中心に、中村真一郎、武田泰淳、大岡昇平、大江健三郎らにより長篇小説群が相次いで書かれた1960～70年代は、日本における全体小説創作のピークであった。それは、バルザック以来の近代小説の理念を受け継ぐとともに、言文一致運動を経た近代日本語を用いてこれを発展、深化させたものとして、世界文学史上独自の意義を有し、かつ、ラテンアメリカ文学における全体小説の追求と、時代性を共有している。本研究では、このような広い観点から、日本の戦後文学の特質について考察を深めるための準備となる基本的見取り図を提示することができた(文献=図書『まだ見ぬ君への手紙-野間宏「青年の環」と三島由紀夫「豊饒の海」』)。

(2) - 「3. 研究の方法」の(2)で触れた、白百合女子大学大学院における学外講師陣による連続講演は、すべて上記の研究成果に反映しているが、その活字化は、本研究を離れても、「全体」というテーマをめぐる文学、思想、哲学の領域横断的な考察として、大きな意義を持つものである(文献=図書『全体と部分』)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9 件)

井上隆史、『鏡子の家』論、三島由紀夫研究、査読無、NO.14、2014年、pp.16-37.

井上隆史、昭和三十七年の全体小説論、中村真一郎手帖、依頼原稿、NO.9、2014年、pp.19-34.

井上隆史、近代日本の肖像 野間宏、中外日報、依頼原稿、5/2,5/7,5/9の三回連載、2013年

井上隆史、蓮田善明「詩と批評」について、三島由紀夫研究、査読無、NO.13、2013年、pp.15-23.

井上隆史、『四季』のアレテイア、中村真一郎手帖、依頼原稿、NO.8、2013年、pp.52-56.

井上隆史、三島由紀夫における国家・天皇・文学、アナホリッシュ国文学、依頼原稿、NO.2、2013年、pp.112-121.

井上隆史、近代日本の肖像 武田泰淳、中外日報、依頼原稿 10/4,10/6,10/13,10/18の四回連載、2012年

井上隆史、江藤淳『作家は行動する』の想像力論、三島由紀夫研究、査読無、NO.12、2012年、pp.83-94.

井上隆史、近代日本の肖像 三島由紀夫、中外日報、依頼原稿、5/3,5/8,5/10,5/15の四回連載、2012年

(翻刻)

井上隆史・佐藤秀明・工藤正義、未発表「オリンピック」取材ノート(全)、三島由紀夫研究、NO.15、2015年、pp.166-185.

井上隆史・佐藤秀明・工藤正義、未発表『豊饒の海』創作ノート(11)、三島由紀夫研究、NO.14、2014年、pp.85-115.

井上隆史・佐藤秀明・工藤正義、未発表『豊饒の海』創作ノート(10)、三島由紀夫研究、NO.13、2013年、pp.106-122.

井上隆史・佐藤秀明・工藤正義、未発表『豊饒の海』創作ノート(9)、三島由紀夫研究、NO.12、2012年、pp.147-159.

[学会発表](計 2 件)

井上隆史、(招待講演)「イタリア美術と三島」、三島由紀夫研究会公開講座、2014年9月21日、アルカディア市ヶ谷大会議室(東京都千代田区)

井上隆史、(招待講演)「セバスチャン・コンプレックスの系譜 ガブリエーレ・ダンヌンツィオ/三島由紀夫/デレク・ジャーマン」、東京大学大学院総合文化研究科・教育学部 駒場博物館 特別展 ダンヌンツィオに夢中だった頃、2013年11月2日、東京大学駒場博物館(東京都目黒区)

[図書](計 7 件)

井上隆史、新典社、『まだ見ぬ君への手紙-野間宏「青年の環」と三島由紀夫「豊饒の海」』(仮題)、2015年刊行確定、約250ページ

井上隆史、『ダンヌンツィオ論集』、2015年刊行確定、学会発表の活字化(共著)

井上隆史、弘学社、『文学と悪』、2015年、157ページ(共著) 執筆担当 pp.89-99.

井上隆史、私家版、『神奈川近代文学館蔵・野間宏「青年の家」草稿原稿資料総覧』、2015年、40ページ

井上隆史、弘学社、『全体と部分』、2015年、187ページ(編著)

日本近代文学館編、八木書店、『近代文学草稿原稿研究事典』、2015年、403ページ(共著) 執筆担当 pp.249-252.

井上隆史、弘学社、『異文化の中の日本文学』、2013年、190ページ(共著) 執筆担当 pp.155-170.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 隆史 (INOUE, Takashi)

白百合女子大学・文学部・教授

研究者番号：10251381

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし